

【八代七浦広報グループ合同特集】

野生鳥獣と向き合う

大切に育てた農作物や豊かな森林が、野生鳥獣に食べられてしまうなどの被害が日本各地で増えています。野生鳥獣による被害は、地域に暮らす住民の生活に大きな影響を与えています。被害を防ぐために私たちに何ができるのか、何をすべきなのか、一度考えてみませんか。

※この特集は、八代市・芦北町・津奈木町・水俣市の広報担当者が協力して作りました。

【写真説明】

1_シカが木に角をこすりつけると、そこから菌が入り木が腐っていきます/2_イノシシが水稲を踏み荒らし、泥浴びをした跡/3_カモ類やカラスによって園芸作物が食べ散らかされています

野生鳥獣の生態と特徴

野生鳥獣による農林水産業や自然環境への被害が問題となっています。今回はシカ、イノシシ、カラス、サルについて、その生態や習性などを詳しくみてみましょう。



シカ

草食性でさまざまな種類の植物の葉や樹皮などを食べます。日中は森林に、夜間は人里に下りますが、慣れると日中も姿を見せるようになります。警戒心の強い動物で、危険を感じると「ピイツ」という鳴き声を出して、仲間へ危険を伝えます。



イノシシ

繁殖力が強く、毎年4~6月頃に平均して4、5頭を出産します。嗅覚がすぐれ、鼻先だけで60%程度のもは持ち上げる力があるとされています。ほとんどの農作物で被害が発生。農作物を食べるだけでなく、踏みつけや掘り起こしも起きています。



カラス

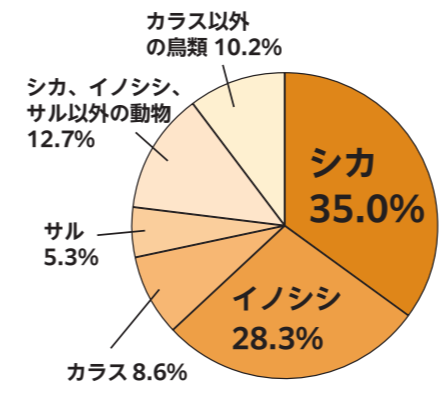
3~7月にかけて巣を作り、一度に3~5個の卵を産みます。ハシブトガラスと、ハシボソガラスの2種類が日本では主に見られます。雑食性で、穀類や果実、昆虫、鳥類の卵やヒナ、残飯、動物の死体までさまざまなものを食べます。



サル

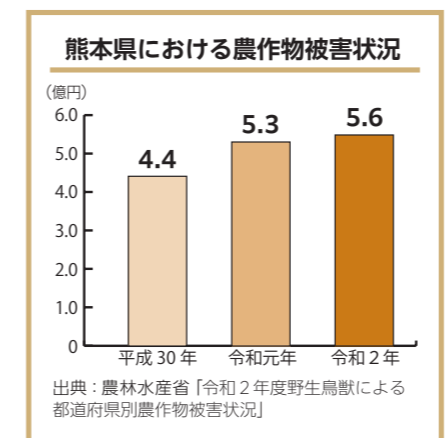
集団で行動し、活動時間は通常、日の出から日没までで、夜間は行動しません。被害は季節を問わず発生し、果物や野菜、水稲、大豆、イモ類などが狙われます。人に慣れると家屋に侵入したり、大胆不敵な行動をとることがあります。

最も農作物を荒らす鳥獣は？



出典：農林水産省「令和2年度野生鳥獣による農作物被害の推移（鳥獣種類別）」

令和2年度の野生鳥獣による農作物の被害額は全国で161億円。そのうち、最も被害額が大きい鳥獣はシカで、全体の35%。被害額の約75%をシカ、イノシシ、カラス、サルが占めています。



鳥獣被害を考える

日本各地で発生し、その解決が求められている鳥獣被害。大切に育てた農作物や豊かな森林が、シカやイノシシなどの野生鳥獣に食べられてしまうなどさまざまな問題が発生しています。熊本県も例外ではなく、県内の野生鳥獣による農作物の被害額は、平成30年度は約4億4096万円で、令和2年度には約5億5782万円で約1.3倍に増加。八代海沿岸では近年カモ類による被害が急増しています。被害は深刻で、農業を営む

人が継続する意欲を失い、農業をやめる選択をするなど、被害額以外にも大きな影響を及ぼしています。深刻化している主な要因は、「野生鳥獣の生息域の拡大」「狩猟による捕獲量の低下」「耕作放棄地の増加」などです。その1つ、野生鳥獣の生息域は「いつでもエサが食べられる」「隠れられる場所がある」「捕まらない」の3つの環境がそろうことで、野生鳥獣にとって安住の地となり、拡大していきます。

環境その1
いつでもエサが食べられる
イネのひこばえや収穫物、収穫しないままの果実、墓に置かれたお供え物などを放置することで、野生鳥獣の餌になります。

環境その2
野生鳥獣が隠れられる場所がある
雑草や草木が生い茂り、見通しが悪いと、動物の隠れ場所や餌を食べる場所になります。

環境その3
捕まらない
防護柵を設置するときに、囲い方が一部であったり、柵と地面の間に隙間が開いたりすると、防護柵としての機能が発揮できず、野生鳥獣の数を減らすことができません。